

山のおさめるその池では、カエルたちがとても仲よくくらしていました。というのも、ここではカエルどうしのけんかは禁止されていたのです。

さて、その池に半七はんしちという名のカエルがいました。ある日のこと、半七がのんびり池を泳いでいると、五六七ごろしちという名のカエルがツイー、ツイーと、半七をおいこしていきましました。

半七はこういうことにはがまんできません。根っからの負けずぎらいなのです。すぐに五六七を追いかけて、となりに並びました。そして、ニヤリとわらって追いこしました。

こうなると、五六七の方もむきになって泳ぎだします。二匹はほとんど同時に向こう岸の岩にたどりつきました。



カエル半七



「なあ、あにさん。どうやらあっしの勝ちのようですね」と、半七が言いました。

「ばか言うんじゃないねえ。オレの指が先だったろうが」五六七も負けてはいません。

「いやいや、あっしの指先がちよこっとだけ先でした」

「オレのが先だ！」

「あっしです！」

五六七は「ファン！」と顔をそむけて、岩へ上がっていきましました。そして、ゴロリとねそべり、日なたぼっこをはじめました。

半七も負けずに岩へ上がって、五六七のとなりにねそべりました。チラリと五六七を見て、五六七と同じように両手を頭の後ろにやります。